

<後期オリエンテーション>

A. テーマ：キリスト教と社会理論の諸問題（1）

B. 講義目的

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。こうした対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、キリスト教と社会理論との関係という視点から、この問題領域にアプローチしたい。

C. 講義内容

「キリスト教と社会理論の諸問題」というテーマをめぐっては、今年度から始めて、今後5年程度をかけ、体系的な議論を展開することを予定しているが、今年度は、このテーマの方法論的基礎あるいは前提に属する諸問題が論じられる。

方法論に属する問題としては、宗教言語論（隠喩・モデル）、解釈学、コミュニケーション論、システム論などが、扱われる。宗教の概念規定や、宗教と文化との関係論は、ここで、論じられる。

以上が、本年度の講義内容の中心となるが、時間が許す範囲で、このテーマをキリスト教思想として論じる際のもう一つの前提である、聖書の社会思想（民族、政治、経済、法など）についても、基本的な考察を行いたい。

D. 注意事項

- ・レポートによる。（講義内容の理解と、それとの関連における問題の展開を問う。）
- ・受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（金3・4、午後2時以降）を利用するか、メール（アドレスは、授業にて指示）で行うこと。

E. 講義予定

前期：キリスト教と近代的知

- ・ティリッヒと近代哲学（ドイツ）、カントからシェリング
- ・自然神学再考、マクグラス

後期：方法論的考察と聖書の社会論

オリエンテーション	9/28
I：象徴・言語・システム	
1. 象徴・言語 1	10/5
2. 象徴・言語 2	10/12
3. システム・宗教 1	10/19
4. システム・宗教 2	10/26
II：レトリック・メタファー	
1. レトリック・メタファー	11/2

2. メタファー・モデル	11/9
3. イエスの譬え	11/16
III : コミュニケーション・解釈	
1. 伝統と意味の地平	11/30
2. 多元性と対話	12/7
3. イデオロギーとユートピア	12/14
IV : 宗教と文化	
1. 宗教と文化1 —— 構造	12/21
2. 宗教と文化2 —— 動態・歴史	1/18

<言語論の意義——言語的存在として人間>

1. 言語と人間

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。」

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」

2. 広義の言語あるいは言語性と啓示

Paul Tillich, *Systematic Theology. vol.1*, The University of Chicago Press, 1951.

There is no reality, thing, or event which cannot become a bearer of the mystery of being and enter into a revelatory correlation.

There is no difference between a stone and a person in their potentiality of becoming bearers of revelation by entering a revelatory constellation. But there is a great difference between them with respect the significance and truth of the revelations mediated through them. (118)

The importance of "word," not only for the idea of revelation, but for almost every theological doctrine, is so great that a "theological semantics" is urgently needed.

Revelation cannot be understood without the word as a medium of revelation. The knowledge of God cannot be described except through a semantic analysis of the symbolic word.

The biblical message cannot be interpreted without semantic and hermeneutic principles. (122)

Revelation through words must not be confused with "revealed words." Human words, whether in sacred or in secular language, are produced in the process of human history and are based on the experiential correlation between mind and reality.

Revelation uses ordinary language.

The word as a medium of revelation points beyond its ordinary sense both in denotation and in expression. (123)

transparent language (124)

S. Ashina

3. 例外の問題、例外と一般

キルケゴール『反復』（梶田啓三郎訳、岩波文庫）

「一方に例外が、他方には一般者が立っています。そしてこの争闘自体が、例外がしでかした恥晒しな騒ぎごとにたいする一般者の怒りといらだち、それから例外にたいする一般者の溺愛、この両者の間の奇妙な葛藤なのです」、「例外は自己みずからを考え抜くことによって同時に一般者を考える、例外は骨身をおしませずにはたらいで自己みずからを作り上げることによって一般者のためにはたらく、例外は自己みずからを説明することによって一般者を説明する。ですから例外は一般者と自己みずからとを説明します。」（156-157）

4. 例外と主権

1) Alex Murray, *Giorgio Agamben*, Routledge, 2010.

In order to grasp the overall unity of Agamben's thought it is worth exploring its fundamental premise: that the human is defined --- and constantly being redefined --- by its 'faculty' for language.

Ontology, politics and literature, and the relationships between them, are therefore the crucial topics of Agamben's work. (5)

2) Giorgio Agamben, *State of Exception* (translated by Kevin Attell), The University of Chicago Press, 2005.

The essential contiguity between the state of exception and sovereignty was established by Carl Schmitt in his book *Politische Theologie* (1922). Although his famous definition of the sovereign as "he who decides on the state of exception" has been widely commented on and discussed, there is still no theory of the state of exception in public law, and jurists and theorists of public law seem to regard the problem more as a *quaestio facti* than as a genuine juridical problem.

the legal and the political

The question of borders becomes all the urgent:

they find themselves in the paradoxical position of being juridical measures that cannot be understood in legal terms, and the state of exception appears as the legal form of what cannot have legal form. On the other hand, is the law employs the exception --- that is the suspension of law itself --- as its original means of referring to and encompassing life, then a theory of the state of exception is the preliminary condition for any definition of the relation that binds and, at the same time, abandons the living being to law. (1)

The immediately biopolitical significance of the state of exception as the original structure in which law encompasses living beings by means of its own suspension emerges clearly in the "military order" issued by the president of the United States on November 13, 2001,...

a legally unmanable and unclassifiable being

Neither prisoners nor persons accused, but simply "detainees" (3)

Guantánamo

a suspension of the juridical order itself,

it defines law's threshold or limit concept. (4)

The expression *full power (pleins pouvoirs)*, which is sometimes used to characterize the state of exception, It derives from the notion of *plenitudo potestatis*, (5)... canon law.

It is perhaps at this point to look back upon the path traveled thus far and draw some provisional conclusion from our investigation of the state of exception. The juridical system of the West appears as a double structure, formed by two heterogeneous yet coordinated elements: one that is normative and juridical in the strict sense (which we can for convenience inscribe under the rubric *potestas*) and one that is anomic and metajuridical (which we can call by the name *auctoritas*). (85-86)

5. システムとその外部

沖永宜司「宗教体験から見た脳と心——心身問題への逆照射」(パネル「脳科学と宗教体験——現代における宗教哲学の立ち位置」、日本宗教学会・第69回学術大会、2010/9/5)

「宗教は科学では解けない真理を保ち続けるのか、という議論も確かにある。しかしこれは言説対言説の関係である。これに反して、説明という形態自体を根本的に切り崩す働きとして、ここでは宗教体験を捉える。たとえば、超常現象の存在が説明された場合、それは一瞬合理性を超えた知が獲得されたかのように思えるが、説明の体系内に取り込まれた時点でその「超常」性は剥奪され、その世界は合理化された平板な世界になり得る。それに対して説明以前の超越性は、どこまでも合理的世界の根拠を覆す点で、合理性内部には取り込まれない。そして合理性の体系はその根拠を必ず隠し持つので、この超越性は根拠以前の次元として、どこまでも存在し続ける。しかもそれはこの体系内の言語以前であるため、その体系内の言葉では語り得ない。しかしそれが実在の姿なのである。

宗教体験はこのような合理性の根拠以前への推進力である。そして合理性とは「役立ち」構造にほかならず、したがって宗教体験は「役立ち」構造の破壊を通じて、知識の根拠を無効化する。そして自分自身の根拠は持たない。一方、知識は疑われない前提の上で、かつ特定の目的に役立つコンテキストの中で機能する。脳という概念は、物質の付随物としての意識をコントロールするためには有効だろう。反対に心や実体化された魂でさえも、死後も存続する生というコンテキストの中で意味を持つ。しかし宗教体験は、目的や利用の構造を破壊し、死後存続という観念さえをも無効にすることに意義がある。したがって、脳から体験は説明されるのか、宗教現象は脳作用か否か、という問いに対しても、宗教体験はどちらか一方の回答を用意するのではない。これらの問いは知識である限り、その問いの意味自体を無効にするのである。そして、知識を求めた問いへの答えは、必ず宇宙内のどこかに謎を残す。唯物論は観察主観の存在、独我論は外界の存在を自らの内に取り込めない。反対に宗教体験は知識ではない一方、前提もなく謎も残さない。」(レジュメ集・12-13頁)

↓

合理性(世界、体系)とその根拠(超越性)

この両者の関係をめぐっては、現代思想の多方面で関連の議論が展開されている。

ウィトゲンシュタイン、ゲーデル、クーン、シュミット、アガンベン、ティリッヒ